

真の読解力とは、単に長文を効率よく読み解けることではありません。相手の立場や気持ちを察するコミュニケーション力や、物事の本質を読み解く力も必要です。また、真の読解力を支える記憶力も同様で、単に覚えるだけでなく、その目的や使い先を理解する必要があります。

今年度導入した二つの教材は、真の読解力と記憶力の育成を目的に十分な試行期間と調査を経て導入しました。

本格導入して約半年ですが、子どもたちなど様々な方面からうれしい声をいただいております。学力だけに留まらず、子どもたちには「未来を生きる力」を育んでほしいと願っています。

子どもたちの生きる力としての真の読解力

新施策の狙いや現場の手応え、そしてこれまでの教育行政の歩みを踏まえ鹿屋市が目指すこれからの教育ビジョンについて、中野教育長に伺いました。

自分と郷土を語れる子どもたちに



市教育委員会
なかの けんさく
中野 健作 教育長
県内の中学校教諭や総合教育センター所長等を経て、平成27年から鹿屋市教育長に就任し、現在4期目。精力的に教育革新を進める。

予測困難で変化の激しい未来社会を生き抜くためには、地球規模で物事を考え地域で行動する「グローバルな視点」(グローバルとローカル)が不可欠です。そのためには自分と誇れる郷土について語れる力と、多様な文化や価値観を



▲グローバル教育推進事業の一環で本市を訪れた台北の子どもたち

これを踏まえ、本市では、子どもたちが「かのや風土記」に親しみ、郷土の歴史や文化を学ぶ機会を大切にするとともに、コミュニケーションツールとしての英語を身に付けるため、グローバル教育推進事業にも力を入れています。海外の子どもたちとの対話や交流は、日常生活で得られない刺激と感動を生み、忘れられない「記憶」となって、他者を深く理解する「心の読解力」を育むことにつながるのです。

鹿屋の子どもたちが、郷土に誇りを持ち、世界へと大きく羽ばたいてくれることを心から期待しています。



▲寺子屋事業の一環として高隈地区で行われた盆がま体験の様子

教育は地域と学校の垣根を超えて

「地域の子どもは地域で育てる」という本市の優れた伝統風風をさらに進めるべく、公民館などを活用したボランティア学習支援の鹿屋寺子屋事業や町内会等の協力による「かのや学校応援団事業」などを行ってきました。これらの取り組みは、地域の人々が子どもたちの教育を支えるとともに、子どもたちも地域の活性化を支えることにつながります。

最新技術等の導入や、世界に向けた教育環境の整備を進めつつ、これまでの優れた教育とのベストミックスによる教育が、本市の目指していく「心豊かな人づくり」につながると考えています。



AI in Education 記憶力のチカラ

市教育委員会では、多様な背景を持つ子どもたちがそれぞれのペースで安心して学び、成功体験を積み重ねられる環境づくりの一環として、学習ツール「Monoxer」を導入しました。

本ツールが持つ「反復学習の最適化」と「記憶定着の可視化」という強みを生かし、一人ひとりの確かな基礎学力の定着を全小中学校で一体となって目指しています。

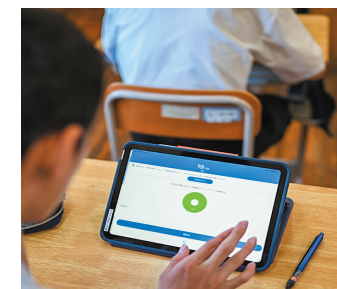


AIが実現する新しいドリル学習

本年度から市内のすべての市立小中学校34校、約9千人を対象に、記憶定着のための学習プラットフォーム「Monoxer」を本格導入しました。

Monoxerの最大の特徴は、AIが児童生徒一人ひとりの理解度や記憶の定着度をリアルタイムで測定する点です。個々のレベルに合わせて最適な難易度や頻度で問題が自動出題されるため、得意な子はさらに上を目指し、苦手な子も的確なヒントによって挫折せず自分のペースで学習を進められます。

これまで漢字や英単語、算数の公式などは「ドリル」で、固定されたレベルの教育とし



▲Monoxerを使って達成率を確認する様子

てすべての児童生徒に提供していましたが、個人の自助努力に頼りがちだった反復学習をAIが最適化することで、「わかった」から「できた」という確かな成功体験が創出されます。誰一人取り残さない「個別最適な学び」の実現が期待されています。

今年7月頃からは、小学5年生の娘がタブレットで楽しそうに宿題に取り組むようになりました。単に問題を解くだけでなく、「達成率100%」という明確な結果や、成果に応じて獲得できるトロフィーがモチベーションになっているようです。以前は宿題を終えたらそれきりでしたが、今では夕食やお風呂を済ませた後のちょっとした隙間時間を見つけては、目標達成に向けて熱心に問題を解いています。

ゲーム感覚で楽しみながら自発的に勉強する姿は、微笑ましく感じています。



ありま ゆきひろ
有馬 幸英 さん
本市出身。小学5年生と中学2年生のお子さんをもつ保護者。